

平成 28 年度上半期 血小板委員会活動報告

血小板委員会委員

高橋幸博（委員長）、石黒 精、小林尚明、國島伸治、笹原洋二、前田尚子
オブザーバー 別所文雄、白幡 聡、今泉益栄、中舘尚也、

活動の概略

1. 血小板委員会 第 1 回会合（会議報告 資料 1）

日時：平成 28 年 6 月 25 日（土）：11:30-12:30、

場所：名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）4 階、第 3 会議室-1 から 2 に変更

出席者：高橋幸博（委員長）、石黒 精、國島伸治、笹原洋二

欠席者：小林尚明（委員）、

オブザーバー：別所文雄、白幡 聡、今泉益栄

議事内容

1. 血小板委員会委員 3 名の欠員の公募の件、および前血小板委員会 委員長 中舘尚也先生にオブザーバーとして、事務局から血小板委員会への参加協力の上承を得ている件の報告。

2. 議題

1)。「ITP の国際標準化」

国内では疾患名の混乱が生じている。特発性血小板減少性紫斑病、免疫性血小板減少性紫斑病、免疫性血小板減少症等。また、疾患名に加え、病期分類、予後についても欧米国際雑誌との齟齬が生じている。今後、内科領域と歩調を合わせるか、小児 ITP は急性期が多いなど成人 ITP と特徴に違いもあり、別途検討すべき時期と考える。その第一歩として国際分類との整合性を検討する必要がある、既存データで解析する。また、小児領域での国際標準化の現状把握のため、小児 ITP の国際研究グループである international cooperative ITP study group (ICIS) の動向と情報を逐次入手し、今後の活動の上の参考として検討する。

2)「ITP の診断・管理」、

小児 ITP は、通常は骨髄検査によらず、臨床症状や一般診療での血液検査と主に鑑別診断から診断される。今日、骨髄での造血状態を評価する検査法として幼若血小板比率 (immature platelet fraction) やトロンボポイエチン血中濃度などを用いての診断評価や管理法に用いられており、小児 ITP としても検査項目としての有用性を検討する。

3)「トロンボポエチン受容体 (TPO-R) 作動薬」

成人領域では TPO-R 作動薬エルトロパム (eltombopag)、ロミプレート (romiplate) の使用報告例や治療アルゴリズムへの検討が行われている。小児 ITP は急性型が大半で

あり、慢性型でも自然緩解が望めること、ステロイド薬の長期投与の合併症の問題、小児の脾摘での感染症や免疫系への影響なども考慮し、より積極的に検討する必要がある。27年度報告にもあるように国内外の現状を分析し、小児での TPO-R 作動薬について検討し、その使用について方向性を示していく。

4) 「先天性血小板機能異常症への対応」

現在、先天性血小板機能異常症の同委員会への問い合わせ症例に関して、國島先生、笹原先生の研究費で診断解析をお願いしている。特に問題を生じていない。しかし、WAS 治療へのガイドや国際血栓止血学会 (ISTH) の血小板関連の動向について情報収集が必要である。現在 ISTH の SSC に國島先生が参加されており、別途、国立循環器病センター輸血部の宮田先生が HIT の関係で血小板の SSC に参加されている。両先生に ITP 情報の入手が可能か相談する。また、中舘先生からも情報入手について相談する。

5) 次回日本小児血液がん学会の演題依頼

1. 笹原先生、國島先生の方で、先天性血小板機能異常症の最近の知見について報告できないか検討していただく。」
2. 国際標準との比較 今泉先生が以前まとめておられた？とのことで相談する。
3. ITP へのガンマグロブリンの 1 g 投与が一般化している。保険での用法改定に向け、既報告例での実態を解析と用法改定には論文化が必要である。

追加協議事項

- 1) 中舘先生から、既に太田先生が作成されたご家族向け ITP パンフレットの原稿を預かっておられる。その取り扱いをテイジンと協議する。
- 2) 現在中舘先生のところで管理中の ITP データベースの今後の取り扱い。日本小児血液学会から今後のこともあり移管を協議するように指示があったことを報告する。

なお、データベースの管理を成育センターで管理していただく場合の管理費用をどうするか検討課題 (同日学会山下氏と相談し、どの程度費用が必要か連絡し、費用に関して理事会と協議していただくこととした。

2. その後の活動経緯

1)。「ITP の国際標準化」

① 小児 ITP 病期分類

小児 ITP の病型分類として、成人 ITP の病型分類と歩調を合わせ急性型 (ITP 発症から 6 か月) および慢性型 (発症 6 か月以降) に区分してきた。しかし、2009 年に international working group (IWG) および international cooperative ITP study group (ICIG) が策定した ITP 分類が、国際雑誌でも採用され一般化しつつある。IWG/ICIS の ITP 分類では新規診

断型 ITP（発症から 3 か月）、持続型 ITP（発症 3 か月から 12 か月未満）、慢性型 ITP（発症 12 か月以降）に区分されている。血小板委員会では、国際化並びに標準化および治療薬剤の評価を今後進めるにあたって、IWG/ICIS の ITP 分類への移行も考慮しつつ既に本委員会に登録された ITP 症例で検討することとし、同結果は第 58 回日本血液・がん学会（会長黒田達夫教授；品川プリンス）一般演題で中舘尚也先生が報告を予定している。

2) 臨床検査法（網血小板数）

血小板減少症の動態把握に蛍光色素を用いた網血小板数が、有用であることが明らかにされつつある。小児 ITP の血小板動態の把握について有用か検討

3) 「2nd line の小児 ITP 治療ガイドラインの策定の準備

① TPO-R 作動薬エルトロパム (eltombopag)、ロミプレート (romiplate) の使用報告例の文献収集を行い完了した。

② 小児 ITP に対するリツキサンの使用に関して、

平成 28 年 9 月 7 日に厚労省から日本血液学会、埼玉医科大学病院 総合診療科の宮川義隆教授を通じ使用の実態と小児 ITP 治療への必要性について回答するようにとの指示を受ける。小児 ITP 研究会にも連絡し、回答書を作成し、日本小児血液・がん学会に回答（案）を提出し、理事長の承認を得た後、日本血液学会を通じ平成 28 年 9 月 9 日に厚労省へ提出した（資料 1）。

厚労省では ITP に対するリツキシマブ（リツキサン）の「公知申請」を協議中で、小児 ITP の治療ガイドラインにリツキサンの記述が必須であることから、早期に当委員会で協議を予定している。成人 ITP の治療ガイドラインにおいても、リツキサンは 3rd line の治療に位置づけられており、2nd line に上げる協議を行っている。厚労省はまず、成人 ITP で審議したのち、小児 ITP へのリツキサン治療は治療ガイドラインを整備したのち、日本小児血液・がん学会を通じて「公知申請」を出すようにとの連絡を受けている。

3. 血小板委員会 委員選考結果

事務局から平成 28 年 11 月 4 日の理事会で、新規血小板委員会委員（定員 3 名）：今泉益栄先生（宮城県立こども病院 血液腫瘍科）と東川正宗先生（伊勢赤十字病院 小児科）の両氏が血小板委員会委員として承認される。

4. 第 2 回血小板委員会 開催予定

日時：平成 28 年 12 月 16 日 17:00~18:00

場所：品川プリンスホテル メインタワー3階 やまぼうし

議題内容

1. 新規血小板委員会 委員の紹介
2. 現在の急性型、慢性型の分類と国際分類 (IWG/ICIS) 分類との比較に関する報告と今後の方針
3. 先天性血小板機能異常症の検査依頼状況
4. 小児 ITP の治療ガイドラインの改定、2nd line の治療ガイドライン
リツキシマブ (リチキサソ) と TPO 受容体作動薬
5. ITP 患児・者の家族へのパンフレットの改定の協議
6. その他

上記を予定しています。